

クリスマスの4週間前の日曜日、今年は12月1日からアドヴェント（待降節）が始まります。しかしこども園、中高、大学、法人で守られるクリスマス礼拝は、学事暦の関係上12月25日より10日から2週間も早く守られることになっています。そのことを踏まえ今年度から宮城学院ではアドヴェントを2週間ほど前倒しで守るよう致しました。

実は教会暦の新年はアドヴェントから始まります。したがってこの時期は、一年の来し方を振り返り、あれやこれや自分の至らなかったことを反省しつつ、世の闇を照らすまことの光として到来された御子イエス・キリストの降誕と再臨への備えをなす期節なのです。典礼色には「悔い改め」を表現する紫色が用いられます。教会によっては克蘭ツに立てられる4本のキャンドルやリボンを紫色にしているところもあります。

ところでチャペルの入り口に、今年から太く大きな黄土色のキャンドルが4本立てられることになりました。もちろん、チャペルのなかの克蘭ツにも細長い黄土色のキャンドルが立てられています。なぜだかお分かりになるでしょうか。そうです。今年度発足したミツバチ科学研究部門が家政館の屋上に設置した3つの巣箱にいる1万匹のミツバチたちが、甘い蜜と共にせっせと産み出してくれた蜜蝋を用いて作られたキャンドルなのです。まさに宮城学院純正100%蜜蝋キャンドルです。

一般的なキャンドルは、パラフィンなどの石油精製物から作られますが、蜜蝋製キャンドルこそは、西欧世界で最も古くからキャンドルの原料として用いられてきた由緒正しき正統的なキャンドルと言えるでしょう。特徴は、ふっと吹き消しても煤や黒煙を発生させず、橙色の温もりある炎を立ち上げらせ、ほのかな甘い香りを漂わせるところにあります。チャペルで礼拝を守るときには、キャンドルを灯すことにしていますから、ぜひ近づいて蜜蝋特有の香りと炎の色合いを楽しんでみてください。

アドヴェントを迎える季節になると私には教会学校時代に毎年経験したページェント（降誕劇）のことが懐かしく思い起こされてきます。主イエスの母マリア、父ヨセフ、天使ガブリエル、ヘロデ王、東方の占星術の学者や羊飼いたちなど、セリフの多い重要な役は上級生、下級生は大抵、その他大勢の羊や天使に扮するのが常でした。そんな時、上級生のお兄さんやお姉さんに憧れもし羨ましくも思ったことでした。ところが6年生の時に晴れてヨセフ役に抜擢された時は、身勝手なものでこんな大役を引き受けさせられて、うまく演じられるのかと不安と怖れと後悔の念に捕えられたことでした。しかしながら緊張とプレッシャーのなかにも、仲間と思いと心をつなげて、大勢のお父さんやお母さんが見守るなか一所懸命に演じ、表現することに取り組むことができたとき、今でも自らの成長の過程において得難い大切な経験をさせられたとの思いを抱かされるのです。それだけに園児の皆さん、中高生の皆さんが、今年のクリスマスでどんなページェントを演じてくれるのか、大いに期待したいと思います。

ページェントということで脳裏に浮かんでくる詩があります。それは松田明三郎という旧約聖書学者が作った「星を動かす少女」という詩です。

クリスマスページェントで、
／日曜学校の上級生たちは／三人の博士や／牧羊者の群れや／マリヤなど／それぞれ人の眼につく役をふりあてられたが、
／一人の少女は／誰も見ていない舞台の背後にかくれて／星を動かす役があたった。
／「お母さん／私は今夜星を動かすの。／見ていて頂戴ね……」
／その夜、堂に満ちた会衆は／ベツレヘムの星を動かしたのものが／誰であるかを気づかなかったけれど
／彼女の母だけは知っていた。／そこに少女のよろこびがあった。

誰一人として関心を注がない舞台裏で、ただお母さんに見つめられていることに喜びを感じつつ、少女が必死に健気に星を動かす姿が脳裏に浮かんできてほのぼのとした気持ちにさせられます。

この母が少女に注いだ愛の眼差しは、いつしか主イエスが、父なる神が私たちに注いでくださる愛の眼差しに重なっていきます。クリスマス、それは私たち一人一人に対して「わたしの目にあなたは価高く、貴い」と愛の眼差しを注いでくださる神が、救い主なる独り子イエスを世に遣わしてくださるという仕方で、その愛を最も確かに豊かに示してくださった出来事にほかなりません。